

## P1-43 取り下げ

## P1-44 急性期脳梗塞血栓回収療法の準備時間短縮に向けて～視覚的教材の指導効果～

旭川赤十字病院 看護部

○谷口 紗佳、竹澤 祐美、秋保 幸恵、川田 衣子、寺島こずえ、政岡 和美、川原 裕子、山田 弘美

【はじめに】A病棟では、血管内検査治療補助業務（以下IVR業務）を、24時間体制で担当している。これまで、IVR業務担当看護師の知識技術向上と準備時間短縮に取り組んできたが、看護師の能力に差がある。本研究では、視覚的教材（以下DVD）を用いた指導の標準化による教育効果と課題を検討した。  
【方法】期間：2017年6月～2017年11月。対象：IVR業務担当看護師15名。方法：対象者のDVD視聴前後における血栓回収療法準備に要したシミュレーション時間と技術評価表を用いた評価結果をt検定で比較した。DVD視聴回数とシミュレーション時間・技術評価結果の相関関係を調査した。有意水準は、5%未満とした。  
【結果】対象の属性は、看護経験平均7.6年、部署経験平均4.3年であった。DVD視聴回数は平均4回、準備時間平均は視聴前182分・後15.8分で有意に減少した。技術評価遵守率は、視聴前64%・後86%で有意に上昇した。視聴回数と準備時間には有意差がみられたが、技術遵守率には有意差は認められなかった。  
【考察】DVD視聴後、平均準備時間の短縮と技術遵守率の向上につながったことから、DVDは指導教材として有効であった。指導内容が標準化し、映像を繰り返し視聴することで具体的にイメージでき、理解につながったと考える。視聴回数と技術遵守率との相関関係がなかったことから、視聴だけでは伝わりにくい内容があり、技術評価結果を元に個人に合わせた指導が必要と考える。今後DVD活用方法を見直し、更なる準備時間短縮と技術遵守率向上を目指すことが課題である。

## P1-45 一般病棟入院患者に対する看護ケアとしてのアロマセラピーマッサージの提供

高槻赤十字病院 看護部<sup>1)</sup>、高槻赤十字病院 緩和ケア診療科部<sup>2)</sup>

○亀井 由美<sup>1)</sup>、北村 弥生<sup>1)</sup>、藤原 和子<sup>1)</sup>、松井 和世<sup>1)</sup>、岸本 寛史<sup>2)</sup>

【目的】当院では2006年からアロマセラピストの資格をもつ看護師（以下アロマNs）が一般病棟入院患者に対して症状緩和とリラクゼーションを目的にアロマセラピーマッサージ（以下アロママッサージ）を提供している。これまでの経過を報告し、今後の展望について考察する。【方法】アロママッサージの活動の経過と実施の手順を示し、2014年4月～2017年3月の活動の実績を示す。【結果】1、アロママッサージの活動の経過当院では、2002年緩和ケア病棟開設時より看護ケアにアロママッサージを取り入れた。2006年からは一般病棟の患者にもアロマNsが施術を始め、平均のべ60回/年実施し、2014年3月には緩和ケアチーム（PCT）と協働した活動を開始した（週1回2時間）。2、実施の手順一般病棟入院中の患者で希望する者は「アロママッサージ申込書」を記入。主治医の許可とサインを得たうえでアロマNsに提出。アロマNsは患者に説明の後、施術部位を相談し精油を選択。1回15～30分実施後カルテに記載。3、活動の実績 2014年4月～2017年3月にアロママッサージを提供した患者は152名（男71名、女81名）で平均年齢は72.3才。がん患者129名、非がん患者23名であった。主症状は倦怠感、浮腫、痛み、不安などで、施術回数はのべ403回（134回/年）であった。4、倫理委員会を経て活動の拡大に伴い2017年に院内倫理委員会において審査を受けることとなり承認を受けた。患者への説明や同意書を改めパッチテストを実施することとなった。新たなアロマNsが加わるなど体制を整備し2018年6月活動再開した。【考察】一般病棟入院患者に対するアロママッサージはPCTと協働後施術件数が増加した。倫理審査を経て安全性をより高めた新たな体制のもと施術を再開した。

## P1-47 こどもの日常生活に役立つ退院指導を目指して

旭川赤十字病院 看護部

○松井 祥子、堀 智穂子、鈴木佐知子、吉岡 瑞子

【はじめに】核家族が多く若い保護者は受診のタイミングや症状の対処方法など子育てに不安を持っており、保護者に対する退院後の生活に役立つ指導は重要である。また赤十字の思想を基に、子どもたちの健やかな成長を支援するため生活指導を行いたいと考えた。【目的】退院後の生活を視野に入れた指導を保護者へ行い、日常生活の不安軽減を図る。【方法】期間：平成30年3月中旬～5月下旬。対象：小児科入院の保護者10名。指導者：赤十字幼児安全法指導員4名。方法：赤十字幼児安全法の小冊子を用いて「こどもの看病・手当のしかた」の中から1～2項目を指導。その後無記名の自己記入用紙を用いて、指導内容、退院後の生活に役立つかな等の調査を行った。【倫理的配慮】施設内の倫理委員会の承認を得た。また個人が特定できないようデータ管理をした。【結果】アンケート回収率100%。年齢は30代6人、40代3人、60代1人。指導内容は複数回答で、事故の予防2人、発熱6人、嘔吐3人、下痢3人、咳2人、痙攣4人、一次救命処置1人であった。指導時間10～15分で「丁度良い」100%。退院後活用できるかは全員が「できる」と答えた。困ることは「受診のタイミングに迷う」と3人が答えた。【考察】本調査より保護者は子どもに起こりやすい症状について何らかの不安を持っている。指導内容は「退院後活用できる」と全員が返答したこと、保護者の知識を部分的に充足でき有用であった。そのことから、保護者の不安軽減に繋がり健やかな成長の支援に結び付いたと考える。【結論】1. 赤十字幼児安全法の指導を用いた指導は有用である。2. 受診のタイミングの指導を強化し不安の軽減に努める。3. 指導件数を増やし多くの人が活用できる指導を目指すことが今後の課題。4. 指導を通し幼児安全法の普及に繋げたい。

## P1-46 心不全患者への退院指導の標準化

岐阜赤十字病院 看護部

○武藤あかり、大坪 由華、林 華江、増田 彩美、松波 直美

【はじめに】当病棟に入院している心不全の患者は、75歳以上の高齢者が8割を占める。また、認知症の患者の割合（認知症日常生活自立度の以上）も全体の43%と半数近い。そのため、患者・家族の理解度や生活背景にあった指導が不可欠である。しかし当病棟では、退院に向けての患者への指導は、看護師が各自で行っており、活用している資料もないため指導にばらつきがあり十分とはいえない。そこで心不全の療養上の注意点について理解が得られるような指導方法を検討し実施することで、患者の心不全の再燃予防やQOLの向上となると考えた。【実践経過】看護師への退院指導に関するアンケートを行った結果、看護師全員が心不全患者に対して指導が必要であると感じていた。しかし、心不全の生活指導を必ず実施している看護師は31%であった。運動療法の指導に関しては77%の看護師がまったく実施していないという結果になった。実施していない理由は「指導内容が分からない」「患者の協力や理解が得られない」「活用できる資料がない」が多くを占めた。また指導内容についても個人差があった。そのため医師の協力を得て心不全のパンフレットを作成し患者に配布し指導することとした。また看護師に栄養指導、運動療法について勉強会を行った。その結果、心不全の退院に向けての指導や声かけを行う看護師は100%となった。運動療法の指導は全ての看護師が実施できていた。パンフレットを使用した看護師からは自信を持って指導できるようになったと意見が聞かれた。また、患者からは「見やすい」「分かりやすい」といった評価を得られた。【まとめ】心不全の勉強会や心不全パンフレットを活用することで、標準化した退院指導を行うことができたと考えられる。

## P1-48 当院における内服薬自己管理能力アセスメントシートを用いた服薬管理

小川赤十字病院 薬剤部

○横井 大樹、戸塚 孝治、田畑 真一、川野有紀子、栗島 早月、新井 成俊

【目的】近年、医薬品の安全管理が求められる中、入院中の内服薬管理方法（病棟管理や自己管理）は非常に重要である。服薬管理方法について看護師にアンケートを実施すると、評価する時期が定まっていない、判断ミスをした等の問題点があった。そこで今回、内服薬の安全で適正な使用を目的に、内服薬自己管理能力アセスメントシートを作成し、看護師、薬剤師が統一した指標で行った客観的評価と看護師のアンケート結果を報告する。【方法】手術目的に入院している患者に対し内服薬自己管理能力アセスメントシートを作成、ADL自立度、認知度、模擬薬袋評価（以下RCSチェック）、内服薬状況等の項目を設定し、各々1点、合計10点満点とした。評価としてA：10点自己管理可能、B：7～9点自己管理議論必要、C：6点以下自己管理不可能とした。なお、RCSチェックについては用法の異なる5種類の薬袋を作成し、5つの質問事項に該当する薬袋を選択させ、それぞれを点数化して行った。【結果】2018年1月～3月に手術目的に入院した人数は185名、平均年齢64.5歳、入院日数80日、アセスメントシート介入患者は155名であった。その結果A：10点125名、B：7～9点26名、C：6点以下2名であり、自己管理患者は136名、病棟管理患者は17名であった。RCSチェックの点数が8割以上の患者の平均年齢は63.8歳、8割以下の患者では77.4歳であった。【考察】今回の結果より、手術目的にて入院される患者は薬を自己管理する能力が高いことが示された。病棟では、自己管理を行う患者が増えたことで、看護師、薬剤師の配業業務時間が短縮され業務負担が軽減されたと考えられる。RCSチェックの点数では年齢において差がみられ、食後のところを誤って食前を選ぶケースが多かった。